

第 15 回 図解で知る近代化以前の山陰漁業

—新しく島根大学附属図書館に収蔵された山陰の「魚漁図解」—

はじめに

平成 20 年(2008)に「出雲石見魚漁図解」4 冊と「因伯魚漁図解」2 冊が新たに島根大学附属図書館に収蔵された。本資料は巻頭と巻末に当たる部分がなく制作の経緯等が不明であるが、基本的な構成や収録された漁業は、明治 14 年(1881)開催の第二回内国勸業博覧会に出品された「島根県管内漁具類集図」の写し、「島根県下 漁具図説」(東京国立博物館所蔵、鳥取側も対象)とほとんど同じである。

また本文には赤字で修正された箇所も多数みられる。これらから判断して、同「魚漁図解」は「島根県管内漁具類集図」の草稿とみられる。これで同博覧会に島根県から出品された農具と漁具の 2 つの「類集図」(草稿本)が島大に揃ったことになる。今回のコラムはこの資料を紹介したい。



島根大学附属図書館所蔵

本資料の構成と内容

「出雲石見魚漁図解」「因伯魚漁図解」は、図と解が基本的にセットになって漁業の近代化前、すなわち漁船の動力化前の時代の山陰の漁業 164 点を取りあげられている。解説の部分は、「器名」「器具ノ製」「使用法」「地名及地形」「期節」「漁獲名称」の順番に構成され、1つの漁業に漁具・漁法の図 1 点が基本に付けられている。「出雲石見魚漁図解」は壹、貳、参、四の構成で、図と解を合わせて合計 106 点が収録されている。

これを水域ごとに分類すると、海面で使用された漁具、例えば鯔魚(ボラ)網、青花魚(サバ)網、鰻(イワシ)地引網などが64点、内水面では斐伊川・江の川・高津川などの河川と神西湖で使用された漁具が25点、宍道湖(大橋川含む)で使用された漁具が9点、さらに中海(漁場区分としては海面に分類)で使用された漁具が8点。

なお、題名には隠岐が入っていないが、隠岐の漁業も少なからず掲載されている。一方、「因伯魚漁図解」は、上・下の2冊で、上は網漁業中心に、下は雑漁業中心に、両者合わせて図解58点が「出雲石見魚漁図解」より体系的に編集されている。

大橋川の越中網と柴手網

つぎに「出雲石見魚漁図解」の中から越中網と柴手網(「弐の二〜四」に収録)をみておきたい



島根大学附属図書館所蔵

越中網は「麻糸ヲ以テ囊(ふくろ)状ニ」仕立てた網で、これが「松江大川」すなわち大橋川に敷設されていた。同図解には2隻の舟を網の内と外に配置した構図となっている。実際はこの網が大橋川流域に二重、三重に敷設され、8月より翌2月までの漁期にスズキ・ボラ・ハゼを捕っていた。

一方、柴手網は、越中網と基本型が同じで、それに竹柵を同網に張り、中央部分に下り魚用、両端に上り魚用の網を漁期に応じて敷設していた。そして、春柴手網はシラウオ・フナを、秋(冬)柴手網はスズキ・ボラ・ハゼを漁獲対象としていた。ちなみに両網とも現在の越中網、小袋網やシバ手網とは大きく構造が異なっている。

おわりに



本コラムでは山陰の「魚漁図解」のなかから越中網と柴手網の2つの紹介に留めたが、全体としてはそこから近代化前の漁業の地域性(歴史個性)や多様性を窺い知ることができる。

また、当時の人びとの「水産知」(水産資源・生態の認識と利用等)を理解する歴史資料としても興味深い。なお、本資料を底本に翻刻と解題を付けて、『山陰の魚漁図解』(山陰研究シリーズ4)を本年3月に今井出版から刊行した。詳細は本書をご覧ください。

(平成23年12月1日 近現代部会 伊藤康宏)